
知らない人 知る

はんなりーな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

知らない人 知る

【NZコード】

N9013X

【作者名】

はんなりーな

【あらすじ】

主人公は何かを知る予定です。

この駄作を読んでくださる優しい方々にお願いするには心苦しいことなのですが、誤字脱字の指摘をしてくださると感謝感激です。

お節介気遣い

“どうしてこんなふうになつてしまつたのだろうかと、ずっと、ずっとと考えていた。自分はつまらないものになつてしまつた。

森の中の、一段と高い木の上から、辺りを見渡す。夜目が効く視界には、寝静まつた動物や、細かな木々が鮮やかに見える。そしてその先の明るい町並みも。だが遠い。とても遠い。遠すぎて、そこはあやふやにぼやけている。溜息をつくよに、元通りに、呼氣とともに音が漏れる。その人外な音響にぞっとしながら、もう一度街灯まばゆい街を眺めて。それから視界を反転させる。街と逆側。山の麓。そこには小さな集落が多数点在している。かつて自分がいた村のような、小さな集落。今となつては、そんな小さな集落でさえも、街灯の一つや一つは煌々と照つていて。その光が自分の目には眩しすぎて、目がぐらむ。昼間の太陽なんか比じやない。街頭の明かり、家の窓から漏れてくる明かり、そこに確かに生活の跡を見せてくれる光たちが目を突き刺して思わず目を閉じる。視覚を潰す。すると今度は他の感覚が研ぎ澄まされる。気がつくと声が聞こえる。いや、声に気がついてしまつた。街から、集落から、人の声がする。それに今となつては夜行性の森の徘徊者の声も『聞こえる』ようになつていて。一旦意識してしまえばもうそれらを意識の外に弾くのは困難だ。自分の耳が1080度周囲の音をかき集め、吸い取られた音たちはうずまき管を爆散させる。自分の聴覚器が許す範囲のヘルツを限界まで振り切つて、自分の意識は溶解するのだ。もう、自己と他の境が分からなくなつてきていて。二半規管がイカレたか、バランスがとれなくなつてきた。倒れないように体全体で軸を戻そうとすると、荒れ狂う音の波の遠くで羽の羽ばたくような音がする。その音がどこから聞こえるのかと首を一回転した後に視界が暗転した。痛覚が麻痺してきたことを自覚して、少しのいらだちと共に睡を吐く。睡は自分の胸ぐらへと落ちてきて、ようやく自分が仰向けに倒れてい

ることに気づいた。いつの間に落ちてしまったのだろう。さつきまでは確かにあの高い木の上で街を獲物よろしく視姦していたはずだったのに。それにしても高い木だ。あそこから落ちたのなら、骨が何本か折れていると見て間違いない。痛覚が麻痺しているから実感が湧かないけど。近くで獣の鳴く声が聞こえる。このままではきっと食べられてしまうだろう。このままでいてはいけない。そう思つほどに周りの音たちが沈黙する。自分の呼気がその音たちを蹂躪したのだ。聞けば聞くほど人外な振動を耳に訴え続けている。もううずまき感は7割ほど復活していた。それでも今は聞こえてくるものは自分の声だけ。そろそろこの場所でこの姿でいるのは危険かもしれない。場所を変えるか、姿を変えるか。その一択で迷つた挙句、私は前者を選択する。あと10秒もしないうちに獣達は私を食いに来るだろう。その特上な選択肢を度外視する。音は止み、視界が生き返る。聴覚も視覚も元に戻った。ついでに痛覚も超回復に成功している。体を起こして、とにかく上へ逃げよう。獣達の興奮が伝染するようだ。息を吸うと呼気の代わりに笑いが吐き出された。笑いは止まらず、ひきつり笑いが始まる。これではまともに呼吸ができない。酸素が足りない。窒息する。第二の死は笑い死になのか。それではあちらで笑いものにされるな。そんなことをばやけていると、また羽の音が聞こえて、自分の体は空にあつた。

今日は朝からついていないと思う。

朝、外に出る頃には雨が轟々と降つていて、俺は傘立ての中の大きくて古い傘と安っぽいビニール傘を一瞥してから、迷わずビニール傘の方を選択した。豪雨には暴風が加勢していく道行く人達を物理的にも精神的にも妨害する。ああ、嫌だ。こんな天気のひどい日はきっと講義に出てくる人も激減するはず。自分だけ真面目に出席するのが最高に馬鹿らしい。それでも、俺がとつている講義は出席点数がやけに高いので後々レポート等で苦しみたくない自分にしてみれば、今苦しんで後に樂する、夏休みの宿題を先に済ませてしまつ

みたいな心境だ。いくら面倒くさくとも、点稼ぎのために我慢せねばなるまい。地道な努力ほど成功へと近づく方法はないのである。と、そんなことを考えていらわれていたのも講義を終えて講義棟から食堂へと移動しようという時までだった。予想通りに空席が多く、講義室の中も講義の内容もスカスカだったのに辟易しながら階段を降りる。透明な自動ドアから外を見てみると、雨が和らいだような気配は全くなかった。大学に来る際に濡れに濡れた靴と靴下の感触を呼び起こすぐちゃぐちゃという音を聞きながら赤外線センサーが自分を認識してくれるのを待つ。ドアが開いた。それから傘も開いた。昼は何を食べようかなどと考えながら荒れ狂う外の世界へと一歩踏み出す。そして突撃してくる暴風。ニュースレポーターが「まともに立つていられないほど」なんて言つような状況が何となく分かるな、なんてぼんやり思つてゐるうちに、傘を握んでいた左手が風の勢いに持つて行かれて、手に持つていた傘は壊れた。具体的には何本かの骨が不自然に折れて、傘が裏返つていた。その間、正しく刹那、一瞬である。…まあ、安物だからな。こんな日にこんな軽装で外を出歩くという自分はなかなかの猛者だったに違いない。後ろに人がつかえていたので体をドアの横に移動した。中に入れよかつたものの、何故か外側に退避している。少々テンパつてゐるのかもしぬなかつた。壊れた傘を無理やり畳む。目の前を、さつきまで俺の後ろに控えていた人達が通過していく。彼ら彼女らは今見た光景に笑いをこらえられない様子で、口元と目尻を引くつかせながら俺の前を通り過ぎる。意識していなかつたが、そんな反応を見せられてしまうとなんだか急に恥ずかしくなつてきた。無意識に目線が下がつてしまふ。すると、時期は残暑が厳しい9月の中旬だ。通りゆく若者達の服装は、なんというか、露出度が高かつた。生足が大胆である。すぐに目線を上に戻した。一瞬緊張した。咎められているはずもないのに、目の前を歩く人達の目に非難の色を感じたような気がする。ここまでビビリだと、若い男として末期かもしれない。しばらくすると、どうやら講義棟から出てくる人の波が過ぎ

去ったようで、俺はまた建物の中へと避難する。外で少し雨にさらされた。服がまだら模様になつてている。普段は気にならない程度の被害なはずがなんだか氣分が落ち込んだ。傘立てを見ると、破けたり骨が折れたりしたものしか残つておらず、使えそうな傘は皆無である。加えて、普通の傘立ての隣に位置する、「傘シア」という看板が付いているゾーンには傘が無い。傘シアというのはうちの学校で取り上げられている制度で、忘れられて持ち主が不明になつたような傘を無償で生徒達に提供してくれるありがたいものなのだ。俺も過去に何度かお世話になつたことがある。しかし、今日は俺みたいに傘を粉碎された人が多かつたようだし、もともとストックが多いわけでもないので傘シアに備わっている傘がなくなつてしまふのも無理はない。仕方が無いので今度は別棟に向かうことにする。ここは無理だつたが、別棟に設置されてある傘立てにはまだ傘が残つていてるかもしない。講義棟はA～C棟まであり、各棟は一階がピロティになつていて二階以降が廊下部分でつながつていて。雨が地面とほぼ平行にぶつかつてくるようなこの天候で、一階の吹きさらしの部分を移動するのは有り得ない。ということで、講義を終えてから下りてきた階段を再び上る。階段を上の際に吐き出される呼気が普段よりも大きい質量を持つていてるような感じがする。吸い込む空気も通常より重いのか、肺にどんよりと粘着質のある空気が溜まつていく気がした。棟どうしをつなぐ廊下は両側が窓でガードされているにもかかわらず多少水が入り込んでいたようだつた。強風のせいで窓がガタガタ音を立てていて。その音にも負けない程の音量で雨粒は窓に打ち付けていて、幅の狭い廊下は軽く騒音状態だつた。別棟に到着。さつきまでいたのがA棟で、今着いたのがB棟。ここからまた階段を下りて一階廊下を突つ切ると、右手に傘立てがある。染み込んだ水分と今の気分で若干重い足取りで進む廊下の左右には講義室群が並んでおり、悪天候のせいか、やはりいつもよりは人数が少ないようだ。常なら各講義室に5人やそこらはいるはずの弁当組も、今日は大部分が自主的な判断で休校を選んだらしい。

部屋」との状況を眺めながら廊下を歩き、突き当たりまで辿りついで右手を見る。傘立ての中身はどうやら先程と変わらないみたいだ。傘シェアにおいても同様である。ため息をついて今来た道を引き返す。次はC棟に移動だ。C棟の傘立ても同じような状態だったら、諦めて雨の中を走るしかない。こんな天気の中、なんの装備もないで外に出るなんて、イコールで自殺行為だ。また階段を上って2階からの移動。B棟とC棟をつなぐ廊下も、耳をふさぎたくなるほどに騒音を醸していた。階段を下りてまた講義室の中を覗きながら廊下を進む。今度はさつきよりも人数が少ないようだ。誰もいない部屋のほうが多い。やっぱり、今日みたいな日に生真面目に通学してくれる方がマイナー組なのだ。分かつてはいたけが、こうして通学してしまった身としてはどことなくやりきれない。眉間の奥にむしやくしゃしたものを感じながら最後の講義室の前を通過して、右手を見れば。

「あつ。」

傘があった。正しく「あつた」というか、今まさに一人の女子によつて最後の一本が傘シェアのコーナーから引き抜かれている瞬間だつた。目の前でその光景をまざまざと見せつけられる。焦りに、胸の少ししたあたりがググつとうねりを上げているような錯覚がした。結局傘は手に入らなかつた。走つて帰るしかない。

と、その時、俺の声に反応したのか、目の前の女子がこちらを向いた。目が大きい。ショートヘアで髪先にシャギーが入つている。快活な印象をうける子だ。その子がまず俺の顔を見て、次に俺が持つている傘を見て、もう一度俺の顔に視線を向ける。そして手先の傘をゆっくり引き抜くと、これまたゆっくりとした動作でそれをこちらに差し出す。

「あの、この傘使いますか？」

「え？」

女子の声は思つていたよりも大人で、年齢分の成長を感じさせるものだつた。完全に大人というわけではないが、子供には出せない声

調だ。こちらをしつかりと見据えている。とてもきとんとした子みたいだ。彼女の印象を修正した所でこちらも彼女を見直してみる。彼女は、当然のようだが、今手にしている傘以外、雨を防げるようなものは持っていないみたいだつた。傘シェアを利用している時点で十中八九はそういう事情であるはずではあるが、念のための確認だ。それから、彼女越しに見える透明な自動ドアの奥の光景は、なんというか、悲惨だつた。あんな所に女子を一人、傘も持たせずに放り出していいのだろうか？いや、疑問符をつけて入るがコレは疑問じゃなくて愚問である。良いわけがない。言い訳も出ない。俺の中の道徳心が猛つてゐる。視線を彼女に戻す。彼女はまだこちらを凝視している。彼女は俺に穴でも開けようとしているのだろうか？

「あ、いや、良いですよ。そちらが先に手にしましたし。第一、俺傘持つてるし。」

「でも、その傘…」

間髪入れずに彼女が追撃を入れる。この子はどうやら、俺の遠慮が分かつていないと見える。彼女は休むこと無く俺のことを見ていた。頼むからまばたきくらいはして欲しい。

「大丈夫つす。コレ、見た目ほどは壊れてないつすから。そっちのほうこそ、傘持つてないんじやないですか？」

「それは、そうですけど…」

「大丈夫ですつて、ほら。」

なおも食い下がる女子のために目の前で傘を広げる。その半分以上は骨が折れていて、一本はブラブラと揺れている状態だつたがなんとか傘という体は保つていた。ぎりぎり傘だつた。

「まだ使えるでしょ？大丈夫つすから、その傘はどうぞ使ってください。」

俺が傘を閉じる。

「でも、私の方は友達を呼べば何とかなりますし…」

…まるで俺に友達がいないか、もしくは読んでもなんともならないような言い分だ。心外だつた。失礼だつた。そして彼女は真剣だつ

た。彼女は真剣に俺のことを心配してくれていた。俺は彼女に真剣に心配されていた。若干へ口む。それほど俺は友達がいないように見えるのだろうか？それとも俺が持っている傘が原因だろうか？頬むから後者であつて欲しいと願う。

彼女の視線が外れない。このままでは押し問答が続くだけだと、俺は思った。仕方ないので、強硬手段にでる。彼女がいる法とは反対側の自動ドア、俺が今までせにしていた方の出口に体を向けた。

「お気遣いありがとうございます。でも本当に、いっすから。外天気ひどいですし、気をつけてくださいね。」

そう言って自動ドアのセンサーが完治してくれるところに体を置いて、自動ドアが開く。今度は強風に持つていかれないよう丁寧に傘を開いた。開いた瞬間、風にあおられて大きく傘がしなった。

「あ、ちょっと待つて。」

後ろで声が聞こえる。半ばそれを無視するようにして外に出た。雨が横から叩きつけられる。コレは傘があつてもなくても、大差ないじゃないかとため息を付いた。俺は若干早足で外に出た。

気分が乗らないので学食で昼飯を食べることもなく、家路に着くことにした。早く帰つて熱めのシャワーでも浴びよう。そうしたらきっと気分が紛れる。そう考えながら、俺は雨に打たれていた。傘は指していた。でもやつぱりと言つか、それは傘の役目をほとんど果たしていなかつた。右手にはぐしゃぐしゃになつた傘がまとめられている。実は傘はとつくに大破していた。学校からアパートまでの道のりの、ちょうど半分ほどのところにあるコンビニの手前で、タイミングよく壊れたので、俺はコンビニで新しい傘を買って、今はそれをさしている。コンビニで買った傘は大破した傘と全く同じものだつたが、やはり新品という点で強風に対抗しうる何かしらを持っているようだつた。晴れていたならば、あと5分は早くつけたであらう住まいが視界に入つて、もう少し、という気力がわきあがつてきた。風に煽られる体を踏ん張る。もうボトムスはずぶ濡れだつ

た。

ぐちゃぐちゃという音を立ててアパートの、2階の通路になつている部分の下へ避難に向かつ。そこには誰もいないようだつた。少し早足でそこに入り自分を見ると、状況は無惨だつた。体中、濡れていない所がなかつた。でも、そのことが逆に、大学でのショートヘアの子に傘を譲つたという事實を、何処か誇らしいようなものにしてくれるような気がした。俺は良い事をしたんだな、と感じる。大分自己満足ではあるだろうと理解はしていたが、それでも、この悲惨な天氣の中ずぶ濡れになつて帰つてきた身としては少しくらいはある時の自分を誇つても許されるのではないか、という気分になつていた。避難したアパートの雨よけ部分で一つだけ深呼吸する。この荒れた天氣の中、やつとの思いで帰つてきた達成感がにじみ出るようだつた。

- - - バサツ - -

その時、後ろで何か、羽音が起こつた、気がした。鳥、だらうか？こんな雨の中？そう考えて後ろを向く。その方向はアパートの2階部分へと続く階段がある方向だつた。俺の部屋はアパートの3階だ。するとそこには、女人人が立つていた。知らない人だつた。このアパートの人ではなかつた。我が目を疑う、と言うか、先ほどの自分を疑う。どうしたのだろうか？さつき、俺が見たときは、雨よけにはだれもいないと思つたのだが…。

その人は、丈の長い白のスカートに、それに映えるような縁のサマーセーターを着込んでいた。風がスカートを激しく暴れさせていた。思わず、風が見せる彼女の膝に目をやつて、心臓が跳ねるように驚いた。丈の長いスカートというのは、ミニスカートよりも断然扇情的に感じてしまう。彼女は、被つている麦わら帽子を右手で抑えていた。そして、彼女の首からは、もう2つの麦わら帽子が背中の方に流されてあつて、紐で首にかけていなければ、今すぐにでも飛ん

で行つてしまいそうな勢いで暴れている。どうして麦わら帽子を3つも身につけているのか、という疑問はあるにはあるが、何故かそれはそれで完成されているように思い込まされそうだった。

全体的に何かぼやけているような印象を受け、不思議な印象に目をひかれるのだが、彼女が全く濡れていないというのが、どうにも不思議だつた。

ふと、彼女がこちらを向いた。

彼女の目に、射ぬかれる。

「あ、あの！」

気づけば声が漏れていた。声が漏れる、という表現ではいささか不適切なほどにその音量は大きかつたが。彼女は俺の声に反応を示さず、視線を動かさない。

「あの、雨宿り、ですか？」

今度は、彼女と自分との距離に適した音量が出た。その声に、彼女が反応する。まず、自分の後ろを振り向いて、それから前に向き直り、焦つたように左手で自分の顔を指す。

「え…私？」

彼女の声は実に彼女に似合つていた。彼女に合ひ声調だつた。その人が声を発するのだとしたら、この声以外はありえない、といふほどしつくり決まつてゐる。その声はとても驚嘆に満ちていた。まるで自分に声がかけられるという事実がありえないと信じきつているかのようだつた。俺が頷く。彼女は更に驚いた。

「あの、傘とか、持つていらないみたいでしたから。」

自分の声が、自分に不釣り合いなほどに硬質なものになつていると思つた。どうしてか、緊張している。興奮と言つても良かつた。どうしてかの理由が、分からぬ。それなのにその興奮が、妙に納得できる。

目の前の彼女が困つたような目を向ける。

「ああ、そう。雨宿り…かな。うん、そう。」

彼女が微笑する。自分の心が弾んだ。心なしか、彼女も嬉しそうな

表情をしていると思った。

何か、何か会話を繋げなければならないと直感する。彼女とつながりを持たなければならぬと思わされた。そうして焦れば焦るほどに、自分の頭は冷静に混乱した。どうして、俺は目の前の女性に対してこんなにも執着をしているのだろうか？そんな問い合わせ、冷静な自分から送られてくる。しかし、その衝動の波が止むことはなかつた。何かが突き上げてくるかのように俺は焦つて、何か、何かないかと探して、手元の傘を差し出した。もちろん、今買ってきたばかりの新しい傘をだ。

「良ければ、これ、使ってください。」

まるで外人の片言だな、と自分を格好悪く思つた。滑稽だ。彼女も、何処か困ったようなものに表情を変えている。

「いいんです。どうか、お気を使わないでください。」

彼女は胸の前で遠慮の意味を込めて左手を振る。右手はずつと麦わら帽子を抑えていた。風が強い。

「でも……」

なおも食い下がる自分が、明らかに変であるとわかるほどに積極的な頭の隅で自覚して、それから、この状況がまるで先ほどの再現であるといつことに気がついた。俺自身が先ほどのショートヘアの彼女で、麦わら帽子の女性がさつきの俺。それに気づくと、とたんに強く出られない、体がすくむ。こんな無理やりな押しではいけない。頭が回る、回る。頭を回転させようとすればするほど、それは何かしらの糸口をたぐり寄せる思考ではないのだという意識が沸き起こり、焦りを煽る。間をつなぐために頭をかく。それでも、不自然だと思えるくらいの時間が過ぎてしまった。

「あの……」

女性特有の高さを持つ、それでいて心地よい安定感を感じさせる声がした。視線を上げる。困ったような表情が目に映つた。

「私のことは気にしないでくださいそれよりも、びしょ濡れじゃないですか。風邪を引かれますよ？」

半歩身を引いて、階段への道を開けてくれる。狭い雨よけでそうすることじで、彼女は少々雨に打たれるような位置に移動することになるはずだ。雨よけの、雨にぬれて色が変わっているコンクリートのところへ足が置かれる。彼女は夏の涼しい靴を履いていた。

「どうぞ。」

階段の方へ、左手を差し出す。早く行け、といつ意味だろう。右手は相変わらず麦わら帽子を抑えていて、首にかかる一つの麦わら帽子が風の酷さを視覚に訴えてくる。彼女にそこまでさせて、俺は急な恥ずかしさを覚えた。さつきまでの自分がとても身勝手に感じた。顔を伏せる。

「あ、じゃあ。…ありがとうございます。」

ここは、無理を通すことはできないと、思った。顔を伏せたままに、よく頭が働いていないまま早足で彼女の横を通り抜ける。その際に、彼女の顔は見られなかつた。きっと、困った顔をしている。おせつかいな自分に対して、無下に断ることもできない優しい人は、きっと困っている顔をしているだろつ。そう思つと、とたんにこの場から逃げ出したくなつて。

俺は階段を駆け上がつた。

そして、駆け上がる音に紛れて一瞬、「ごめんなさい」という心地よい声が耳に届いた錯覚がした。

バタン

部屋のドアを乱暴に閉め、濡れた服を気にせずに狭い台所を進んで居間へ。ソックスがじゅつじゅつ、という音を立てている。背中のバッグを雑に放置して、それから体にしつこくへばりつく服を何か脱ぎ切ると、風呂場の戸を閉め、熱湯の方の蛇口を回す。最初の方は冷たいままのシャワーが熱を持ち始めた所で調整のために冷水の方の蛇口も回した。まだ少し熱すぎるような気がするシャワーを打ち付けるようにして頭からかぶつた。冷えていた体にはやはり熱

すぎた熱湯に、体が過敏に反応するのを無視して、俺はシャワーを浴び続けた。しばらくしてからつづむいた状態で洗面器に座る。

「…熱い」

滅多に言わない独り言が自分を動搖させた。

気になる視線（前書き）

誤字脱字は「」指摘いただけすると助かります。

気になる視線

翌日。朝。体とともに頭が起きることは無く、目が覚めた後に幾分かの時間を要した。眠い、わけではなかつたと思う。耳の後ろの方の後頭部が血を溜め込んでいるかのように頭が鈍い。昨日のことを見い出したのだ、と思つた。そのことに思い至ると、急に頭が覚醒する。いつたい、自分はどうしてこんなことに思考を費やしているのだろうか？と、疑問が頭をよぎる。もう、あの麦藁帽子の女性と会うことなんて、もうそつそつ無いだろう。自分は何を気にしているのだろう。この広い街の中、俺の対人キヤパシティを加味すると、昨日のような偶然はそうそうないはずだ。偶然、そう、偶然なのだ。そう思うと、どこか悔しさのようなものが浮かんできて、俺は想像以上に苛ついているようだつた。。遮光カーテンを開ける。その感覚自体に舌打ちをした。舌打ちをしてはつとする。どうやら光と共に曇天が広がつた。空が重い。頭の鈍さが気にかかる。朝風呂でも浴びればこの鈍さも収まるだらうか。そう思つて、直ぐに行動に移し、温度を下げたシャワーを浴びた。体がさっぱりしたもの、期待ほどの効果はなかつた。昨日とほとんど変わらない荷物で外に出る。出掛けに新品の傘を手にとつて、階段をゆっくり降りる。階段を全て降り切るという時に、心臓がどきりと動いて、それを自覚すると同時に一気に足を進めた。階段を降りたそこには誰もいなかつた。またイライラが募る。このいらつきの正体が實際にはわかつていてるくせに、それを認めることは許せなかつた。足は自然と早足へ。しかし時折、息が詰まつたかのようにそれが止まる。そういういつもと同じどおりの時間帯に大学へと着いた。

大学に着くと、この曜日の1限の講義と一緒に受けている友達と合流した。その友達は学部も違い、サークルも違う。大学に入学してすぐの講義、内容はオリエンテーションのようなものだつたと思うが、その講義で隣に座つたというだけの関係だ。それでも、大学も

後期に入ろうかという今の時期までそいつとの友人関係は続いている。きっとこの後も続くだろうとなんとなく思う。気の置けない、というほどではないが、それでも気を使うことは多くはない。そんな少し置き過ぎていうよつた距離感が続いているのが心地よい。この曜日の1限目はその距離感を楽しむために来ているといつても良かった。

講義教室の中ほど、廊下側の3人席を一人で占領して座る。この講義はそれほど受ける人数が多くないので、これくらいは余裕で許される。講義が始まるまで10分という所だった。暇をもてあましてしまう。こんなとき、一つ席を空けて隣の友達と会話するという手段もあるが、それはどうにもはばかられる。そのようにして積極的に話をするというのは、いや、田的を持って話をしようというのは、俺が望んでいる距離感を壊してしまうもののようなきらいがあった。そこで教室をボートと眺めることにしてみる。ちょうど女子の集団が教室に入ってくるのが視界に入った。興味がなかつたので視界に入れることもなく、また視界から無理にはずすこともしないで、ただ、その集団が通り過ぎるのを待つ。

(…あ。)

女子の集団が視界の中央付近に入つて来たとき、その集団の中の一人と目が合つた。それは昨日目にした顔だった。 シャギーの入った髪の毛、快活な印象を受ける女の子。 それは昨日の帰り際に、学校で見た女子だった。快活な印象を放つていた彼女は、今はおとなしめの配色でコーディネートされた服装をしていて、それが彼女を大人らしく見せている。その彼女が、昨日と同様に、こちらのほうを目を皿のようにして見てているのだった。俺の後ろの誰かを見ているのかと一瞬の期待を持ったが、壁際の席ではそれはありえない。彼女は間違いない、一切の疑いのない様子でこちらを見ていた。きっと向こうはこちらと目があつてているのに気づいている。気づいていてなお、目線をそらさない。戸惑つた。そして困つた。困惑した後、俺は視線をはずして前を向いた。確かバッグには読み途

中の新書があつたはずだ。それを読んでよい。

自分がどうして困惑しているのか、肝心な自分がわかつていなかつた。しかし、彼女を見ると、あるいは彼女に見られていると、なにか落ち着かない。彼女は何か、俺の知らない場所で俺の秘密を知っているかのように、俺を見透かしているかのように俺のことを見るのだ。十分に妙な恐怖だった。見ず知らずの女子にそこまでの恐怖を感じるというのは、今までない経験だ。彼女はどうしてそんなふうに俺の事を見るのだろう。俺の記憶に、該当する理由、きっかけは見当たらぬ。そもそも、彼女とは昨日が初対面なのだ。何度も考へてもそれらしい理由がわからない。しばらくして授業が始まる

講義の内容は退屈だつた。最初のほうこそ、斜め後ろのそこそこ近くの席まで接近してきた件の女子に気を持つていかれそうになつたが、時間が経つにつれて講義内容が程よいテンポの音の羅列へと変わつていぐ。心地よいテンポは睡眠にはうつてつけて、十数分の睡眠と、その後のまどろみを提供してくれる。俺はそれを甘んじて消費することと、この講義を乗り切ることにした。

講義も終わらうかという頃、タイミングを見計らつたかのよう田代が覚める。講義は今回の内容のまとめに移つてゐるところだつた。まとめの部分をルーズリー／フにさらつと移してみると、講義の終わりのベルが鳴る。講義が終わつてから、件の女子が何かコンタクトをとつてくるとかいう事は無く、彼女は、彼女の友達と連れ立つて講義室から出て行つた。こぢらは席を立たないまま、再び取り出した新書に没頭するフリをしてやり過ごしていた。そのフリをしてやり過ごす間に、一度だけ彼女のほうに意識を持つていくと、彼女がそれに気がついたかのよひにこぢらを見た気がした。が、多分気のせいだと思つ。

その日は「ママ田の講義はを取つていないので俺は友達と別れた後、時間をつぶすために大学の付属の図書館に向かう。そろそろ赤や黄色が混じつてもよさそうなものの、周囲の木々の葉は全てがみずみずしい緑色だつた。図書館に向かうには駐輪場からのルートと、公

道からまっすぐに入つていくる一ツがある。俺はたいていの場合駐輪場のほうから図書館へと向かつ。こちらのほうは原付二輪車やら自転車やらで「じちや」じちやしているものの若干距離を短縮できるからだ。俺にとつて駐輪場程度の煩雜さは苦にならない。両側に隙間なく並べられている自転車の通路を抜けて、左へと曲がるとそこに図書館がある。曲がり角へとさしかかるうとして、そこで俺は足を止める。

(…またか…)

そこにはまた、シャギー髪の女子がいた。今度は一人でいるようだつた。図書館の入り口の前で携帯を眺めている。大人の雰囲気をにじませながら立っている姿は実に魅力的な女性のように思える。しかし、どうしてか、自分は無意識にその彼女の事を避けたがつているようだった。

暇をつぶすために図書館に入りたいが、そうしたら絶対にあの女子に見つかるだろう。それはなんとなく嫌だった。いや、嫌というわけではないのかもしれない。ただどうしてか、妙な焦燥感があるのだ。これ以上彼女に近づくことに、俺は頭の中のどこかでおびえているのだ。そして全力のアラームを鳴らしている。アラーム音は、その振動が脳みそから飛び出して、心臓を打ち鳴らすほどのものだつた。

足を止めた位置から反対方向へと向き直る。今日の暇つぶしは学食で本でも読むことにした。

学食は程ほどに混んでいた。最高に混む時間帯は昼ごろなのだが、うちの大学の学食は大変に繁盛しているらしい。許容できるほどではあるものの騒がしい食堂内で本を読むというのに少々の抵抗を感じ、それでも図書館に戻るということは無かつた。渋々といった感じの足取りで食堂入り口のドアを抜けると、今度は早足で空いている席へと移動する。どう考えたって食堂内の学生たちは俺のことなんて眼中に無いだろうと思うのに、それでも、騒がしい場所に一人でいるところは逆目立ちしている気が抜けなくて落ち着かない。

拳動不審な目が忙しく左右を見渡す。窓際の席の中ほどに、4つほど連続して空いている席を見つけた。テーブルとテーブルの隙間を縫つて目的の席に到着。右から一番目の席を取つて左の席に自分の荷物を置く。じつするじでさりげなく隣の席の使用を妨げる。知らない奴が隣に座つているというのは居心地がよくないという理由からの対策だ。満席のときはそれもばかられるが、そういう時はたいてい知人と一緒に宅を囲むのでわざわざそんなことをすることも無い。一息ついてバッグから新書を取り出した。本を開く。開くが、頭に文字は入つてこない。いつの間にか文字の羅列を追うばかりの作業を続けてしまい、気がつけば内容もわからないままにページの半分ほどを読み損ねていた。

(……はあ…)

どうしてか集中できない。どうしてか調子が乗らない。原因はわかっているのだ。それはきっと、あのシャギー髪の女子に関わっているに決まっている。でも、原因は彼女じゃない。それは自分自身であると、そこにいたるほどにはつきりする責任が、妙に自分を安心させる。誰も悪くはない。自分が悪いのだ。いや、自分も悪くはない。ただ、責任は自分にある。昨日の一件、少々強引に彼女の好意を無碍にした。そして、そのあとすぐに、彼女の心境を知ることになり、俺はどうやら彼女に受け皿を感じているのだった。なんとも小さい、しょぼい理由だ。そんなことで、俺は彼女を避けているのか。本当に小さい。俺は小さい人間だ。そう感じることに、胸のいらいらは消えていく。誰のせいでもない、自分が悪い。そう自覚することで、自分のあり方が明確になつてくるようだ。今度、彼女に会つたら、お礼でも言つべきか。左手がページを進めていることに気がつき、また内容が頭に入つていなかつたことを知る。それでも気にせずに、今度は先の1限の授業を思い出す。彼女は明らかにこちらに気がついている模様で、もしかしたら、向こうもこちらが気がついていること事態に気がついているのではないかと、そう思った。そして、その確率はさほど高くないにしろ、無視できるほど低

くもないのだろうと考える。そうだとしたら、もしかすると彼女は、俺がシカトを決め込んだとでも勘違いするのではないだろうかと思った。実際、勘違いというほどそれは事実と相反してはいないが、それでも、その言葉に含まれる心持というのは、実際のものとはかなり違っている。俺は彼女に対してなんら悪意はなかつたはずだが、それでも『シカト』とはそういうように見られることを、俺は知らないわけではない。だから、彼女はきっと、俺が彼女に対して何らかのマイナスの気持ちを向けているのではないかと感じても、それは無理からぬことなのではないかと、ぼやと思つた。そう考えると、彼女に対する引け目というものはさらに大きなものになり、その引け目から、俺は彼女に対して話しかけるということ、御礼を言うといふことに緊張を覚えてしまうのだろう。そこまで自分を分析して、それが良くない事だと分かつて尚、自分という人は行動を起こす人間ではないという結論に最終的に至つてしまう。自分という人間は本当に小さいな、と感じる結果になるのだった。

そして懸念は現実になつた。俺は彼女に対してお礼を言うことができなくていた。苦手意識というか、引け目を感じているという自覚を持つた後には、自分の中での彼女の印象が濃くなつてしまつようで、その後、彼女の姿を頻繁に目にすることになつた。同じ日に、同じ授業を取つていることも少なくないようで、どうやら彼女は自分が同じ学部に所属しているのだった。彼女の方は相変わらずの反応で、こちらを目にした時は、ずっと、じつと凝視してくる。その目があまりにも大きくて丸いので、まるで鳥のようだなと思った。その目に何か言い知れぬプレッシャーのようなものを感じて、俺はますます彼女に接触することに関して緊張を覚えてしまう。何度も目が合つたこともあつたので、きっと彼女はこちらが気がついているということを知つていてるのだろうと考えるが、それでも行動しない俺に対して彼女は何かマイナスの意思を感じているのかというと、それはまったく分からなかつた。分からないほど、彼女の行動は常に一貫しているのだ。変化がないというほうが正しいかもしねり。

とにかく、仰々しい状況分析を簡潔にまとめるとして、俺と彼女の間には、出会った翌日の1限の授業とまったく同じものが隔たつていて、まるで同じことだった。

2週間がたち、どう考へても御礼を言つタイミングは逃してしまつているのだが、こちらに対する行動を一貫する彼女に対して、俺が感じる引け目というものが収まることは全くなかった。それでもある程度の慣れを感じていた俺は、なんとなく彼女に鬱陶しさも感じていた。俺がコレほどにも気まずさを感じているというのに、彼女はそんなことは知らないとでも言つような振る舞いだ。それに、彼女の方から何か接触があるかといえばそんなことは全くなく、ただただ見てくるだけなのである。こちらからの接触を催促しているかのようで、彼女の行動に若干のいらいらを感じてしまうこともあった。そんなことを考へてしまふのは、きっといつもと同じ被害妄想なのだとわかつてはいるのだが、それでも無理やり俺の意識の中に入り込んでくる彼女は、どうにもやりにくさを感じてしまうのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9013x/>

知らない人 知る

2011年11月23日16時51分発行